

# 英語科

肥 沼 則 明  
久保野 り え  
植 野 伸 子  
栖 原 昂



# 「授業は英語で行う」ことの基本と留意点

## 1. はじめに

本校英語科は、その前身である東京高等師範学校附属中学校時代の明治43（1910）年には既に、英語を英語のまま理解するには音声中心の訓練から始めることや、英語の授業をできる限り英語で行うこと等を、現在の指導計画にあたる『教授細目』（東京高等師範学校附属中学校、1910）に定めて授業を行っていた。さらに、大正12（1923）年にH.E.パーマーが、同校を氏が提唱する「オーラル・メソッド」の実践校としてからは、同指導法に則った形で「聞くこと」「話すこと」を中心としたその指導法を脈々と受け継いできた。もちろん、その伝統に甘んじることなく、時代の変化を見定めながら、目の前にいる生徒の実態に合った指導法を確立すべく新たな取り組みもしてきている。そして、現場の指導者として本当に必要なことは何かということに重点を置いた研究を進め、その成果を以下のように研究協議会で発表してきた。

- 平成8～11年度 … 「育てたい生徒像」を設定し、「聞くこと」「話すこと」を中心とした創造的な言語活動の3年間の指導計画を作成した。
- 平成12～15年度 … 「自立した学習者」を育てるための4つの要素を相補関係を持たせて指導することの重要性とその具体的指導内容を提案した。
- 平成16～18年度 … 入門期指導のあり方と具体的な指導内容を提案した。
- 平成19年度 … 小中連携と中高連携を意識した中学校の具体的指導事項を提案した。
- 平成20～24年度 … 「新学習指導要領に対応した授業作りの工夫」をテーマに、技能統合的な活動の例、カリキュラム編成上の課題、新しい教科書への対応、小中連携を考えた入門期指導の実践例などを提案した。
- 平成25年度 … 「意味を伝える音声指導」をテーマに、授業における様々な工夫や具体的な指導内容を提案した。
- 平成26年度 … 『読める』生徒を育成する系統的指導』をテーマに、生徒が最終的に長文をスラスラと読めるようになるための指導内容を提案した。
- 平成27年度 … 「確かな英語力を身につける学習者の育成」をテーマに、主体的に学習する生徒を育てる指導のあり方と具体的な指導内容を提案した。

このように、本校英語科は時代の要請による事柄はもちろんのこと、英語教育において恒久的に追究されるべき内容も研究してきた。そして、英語科教員全員が最終的に「育てたい生徒像」に関して共通理解を持ち、誰が、いつ、どの学年の、どのクラスを担当しようとも、生徒が戸惑わないような指導を心がけながら、日々の学習指導を行ってきている。

## 2. テーマ設定の理由

本年度は、「1. はじめに」に記した過去の実績や昨今英語教育界で話題になっていることを考え合わせて、「『授業は英語で行う』ことの基本と留意点」をテーマに研究を進めることになった。その主な理由は次のとおりである。

### (1) 学習指導要領から

現行の高等学校学習指導要領（2009）は、「授業は英語で行うことを基本とすること」を謳っているが、これは平成15（2003）年3月に文部科学省から出された『『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』において「英語の授業の大半は英語を用いて行い、生徒や学生が英語でコミュニケーションを行う活動を多く取り入れる」と示されたことを受けている。学習指導要領にあるのは次のような文言である。

英語に関する学科の各科目については、その特質にかんがみ、生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とすること。その際、生徒の理解の程度に応じた英語を用いるよう十分配慮すること。

(第3款「各教科にわたる指導計画の作成と内容の取り扱い」の第2節)

これは知識偏重の大学入試への対応を理由に一向に変わらない訳読式による授業を、実際のコミュニケーションの場面とするよう改革するための方策として取り入れられたものである。「授業は英語で行う」と言うと、教師が英語を使って授業をするということだけを思い浮かべがちであるが、そうではないことが上記から読み取ることができる。すなわち、それは教師側のことを言っているのではなく、生徒にも十分に英語を使わせるということを行っているのである。もちろん、「生徒が英語に触れる機会を充実する」ためにということであるから、教師が話す英語も教材であると考えれば、教師が話す英語の絶対量を増やすということはまちがいない。しかし、より大切なことは「授業を実際のコミュニケーションの場面とするため」という部分である。これは、生徒が授業中にできるだけ英語に触れたり英語でコミュニケーションしたりする機会を充実させることを述べている。つまり、生徒が英語を英語のまま理解したり表現したりする活動をきちんと確保する必要があるということである。そして、そのことによって生徒の英語運用力を高めようというのであり、そのための指導方法の一つの大きな柱が「授業は英語で行う」ことなのである。

では、中学校はどうか。次期学習指導要領はまだ公布されていないが、平成25(2013)年12月に文部科学省から出された「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」で、中学校の授業において「授業は英語で行う」ことの必要性が示されてから、次期学習指導要領では中学校版においても同様のことが明記されることが現実味を帯びてきた。そして、それは以下の平成28(2016)年8月1日に発表された中教審教育課程部会・教育課程企画特別部会の「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ(案)」で確定となった。

2. 各教科・科目等の内容の見直し (12) 外国語 ②具体的な改善事項 ii) 教育内容の改善・充実  
イ 中学校の外国語教育における改善・充実 (p.251)

また、中学校では、生徒にとって身近なコミュニケーションの場面を設定した上で、学習した語彙・表現などを実際に活用する活動を充実させるとともに、高校との接続の観点から、外国語で授業を行うことを基本とするなどの指導の改善を図る。

これに対して現場の中学校教師からは不安の声があがっている。「英語で授業をする自信がない」や「過去に英語で授業をしようとしたが、生徒に『わからない』と言われて諦めた」というのがその主なものである。中には「オール・イングリッシュで授業を行うのはナンセンスだ!」と自説を主張してこれに反対する教師もいる。しかし、「授業は英語で行う」は昨今の英語教育をめぐる流れからすれば、当然出てくるのが予想されたことであり、それにいかに対応するかが私たち英語教師に求められているのである。英語教育界を取り巻く状況を概観すると、中学校の授業において「授業は英語で行う」ことは待ったなしの状況と言えらる。

## (2) 本校の伝統的指導を支える理念から

一方、「1. はじめに」でもふれたように、本校では遅くとも1910年には授業は英語で行うことを基本としていたが、それは当時の『教授細目』に次のように書かれていたことから判明した。

第四、教授一般に関する注意 三、英語を用ふる場合と國語を用ふる場合 (p.237)

「外國語の教授時間には生徒をして其の外國語の行はるゝ社會中にある如き感を抱かしむるを可とす。例へば、教場管理に関する事項を談話する場合、既に授けたる語句を用ひて説明し得る場合、國語を用ひずとも繪画、身振等の助をかり英語にて説明しうべき場合、及び復習、練習に用ふる問答等は成るべく英語のみを用ふ、されど、例へば事物の名称の如き英語を用ひては徒らに長き説明を要するもの、並びに文法上の説明の如き正確を要するものには國語を用ふることゝす。」

当時の授業では、生徒が教師の英語を聞いて理解可能な場合には英語のみを用いて指示や説明をし、逆に、英語による説明では理解が難しい場合には日本語を用いていたことがわかる。また、英語を用いて授業を行うにあたって、冒頭には以下のような理念も書かれている。

一 細目編纂の趣旨及び教授上の注意 三、各方面の教授の関係及び配合 (p.224)

「謂はゆる直讀直解の讀書力を養はんとせば、文字を讀みて解する力の基礎として、先づ聲音の英語を聞きて解する力を養はざる可からず。されば、初級にては聽方を以て中心とし、最初は教材を先づ聽方にて授け、次に之を言方にて練習し、次に之を讀方にて練習し、最後に之を書方にて練習することとす。」

これは、後に本校に来校し、授業を行った H.E. パーマーの「オーラル・メソッド」の理念とも一致するところであり、本校では当時から現在にいたるまで、原則的に「英語を英語のまま理解すること」を前提に「聞く」「話す」「読む」「書く」の順序を重要視してきた。「読む」「書く」活動の前に、生徒が学習する英語を十分に「聞く」ことを経験し、自身でも「話す」ことができるようになるためには、教師が自身の英語を多く聞かせ、生徒にも英語を話させる機会を多く設けることが前提となってくる。

また、新制中学校が発足する前は同一の学校であり、現在は兄弟校である附属高等学校でも外国語科のすべての科目の授業が英語で行われている。さらに、平成 21 (2009) 年度より 3 年生から外国語活動を行っている附属小学校においても専任の日本人英語教師ができるだけ英語で授業を進めている。以上のことは、「四校研」(筑波大学と附属小・中・高が一緒に研究を進める組織)の外国語活動・英語科・外国語科部会が小中高一貫カリキュラムを作成する上で 3 つの大きな共通する指導方法 (①授業は英語で行う、②発表活動を頻繁に行う、③ペア/グループ・ワークを日常的に行う) の 1 つとして取り上げ、研究を進めてきたことでもある。したがって、本校では「授業は英語で行う」ことは日常の当たり前の指導法であり、すでにそのノウハウを持っている。

以上のことから、次期学習指導要領の公布を直前に控えた今、中学校において「授業は英語で行う」こととはどういうことなのか、その基本的な指導方法や使用場面にはどのようなものがあるのか、それを実施する際の留意点にはどのようなことがあるのか、その成果や課題にはどのようなことがあるのか、等を研究協議会で議論することは大変価値のあることであると考え、本年度の研究発表テーマとして「『授業は英語で行う』ことの基本と留意点」を取り上げ、議論を進めることにした。

### 3. 提案

#### (1) 「授業は英語で行う」とは？

##### ① 英語で授業を行う意義

ここであらためて、なぜ英語の授業を英語で行うのか、その意義を確認しておきたい。単に「英語に触れる量を増やす」では不十分である。教師が英語の授業で生徒に英語で語る目的を一言で言うなら、英語という言語を耳で聞いて理解する回路を生徒の頭に作ることだと考える。聞いて理解する回路とは、H.E. パーマー (1924) が示す、「聴覚作用」→「聴覚像」→「概念」に至る過程 (図 1) である。この回路が育っていなければ、その後、その言語を読む力、話す力、書く力はつけられない。

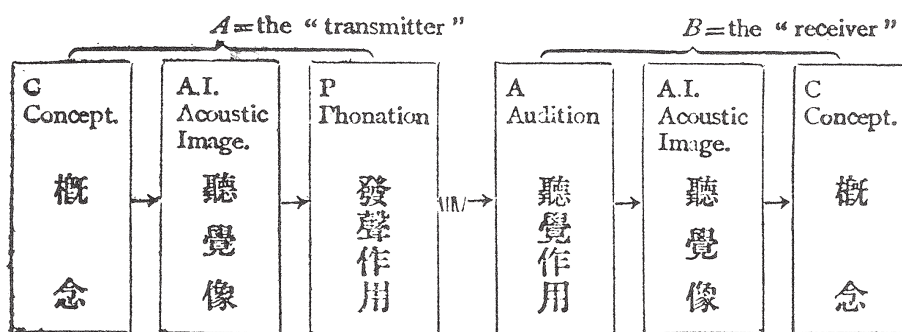


図 1 伝達の最も基本となるモデル図

(出典 Palmer, 1924, p.12)

「聞いて理解する」と言っても、それが表す内容は幅広い。以下に4つの例を挙げる。

- ア) A big house. という一連の音声を聴覚で捉えた後、それが知っている big や house という単語であることを認識（聴覚像を形成）できるか。（これらの単語の意味は知っていることが前提であり、語彙力向上はここでは別問題とする。）
- イ) A big house. という音声を聞いて、「大きい家」という日本語の文字や音声を思い浮かべなくても、表している意味内容（概念）を思い浮かべることができるか。
- ウ) Sit down. と指示された時に、「座りなさい」という日本語が頭を通過しなくても、座れと指示されたことを理解し行動できるか。
- エ) Many of her classmates like e-mails the best. という文を耳で聞いた時に、「彼女のクラスメイトの多くは、eメールが一番好きです。」という日本語の文を頭で思い浮かべなくても、英語の語順のままでも構文も意味も理解することができるか。

以上、4つの側面をあげた。それぞれ

- ア) 単語認識性
- イ) 直接性（日本語訳を介さずに英語から内容を想起する）
- ウ) 即時性
- エ) 構造理解性

と、便宜上ここで名付けてみる。

「リスニング問題が苦手」と言う生徒も、この4つの側面のどこがつかずきとなって理解を妨げているのかを分析することが必要と思われる。

英語で授業を行えば、4つのすべてに影響を与えることができるが、最も意義が大きいのは④の構造理解性であろう。なぜなら、聞いて語順のまま理解していくことは、リーディング時の直読直解にストレートに結びつき、その後の英語力の伸びに大きく関わるからである。既成の音声教材で音声をキャッチする訓練はできても、双方向の意味あるやりとりを交えながら、語順のまま文を理解できるようなインプットを与えることは、生徒の理解度や既習事項を熟知している教師が英語授業を英語で行うからこそ実現できることである。

このように考えると、授業中の指示を英語ですることによって「英語の授業は英語で」を実現するというよりは、意味のある「文」を生徒にわかるように語り、生徒に「文を語順のまま理解する」回路という英語力の基礎を培う授業を行うことこそが重要であると考えられる。

## ② 考えられる「授業は英語で行う」場面

ここでは、実際に英語を用いて行う授業の場面をいくつか紹介する。いずれの場合も入念な授業計画を立てることが不可欠であり、教材・教具の準備や、事前のリハーサルが必要なこともある。初めて行う際には準備に時間がかかるかもしれないが、英語での授業に慣れるに従い、準備の時間も短くなってゆく。粘り強い取り組みが期待される。

また、生徒にとって何が既習か、何が未習かを教師がよく知ってはいなくてはならない。もちろん、教師が使う英語を文法も語彙もすべて既習事項のみとするのに細心の注意を払う、というのは現実的ではない。かと言って、生徒の既習事項を全く考慮せず、教師が思いつくまま話すわけにもゆかない。いわゆる“i + 1”，すなわち第二言語習得のために必須とされる大量の「理解可能なインプット（Comprehensible input）」（Krashen, 1982）を生徒に与えるには、刻々と変わる生徒の“i”，すなわち現在の言語習得のレベルを教師が熟知しておくべきであろう。

### ア) 新文型の導入（オーラル・イントロダクション）

#### i) 場面設定をきちんと行う

まず、新出表現が自然に使われるような場面、つまり、状況や視覚教材などから新出表現の意味が容易に類推できるような場面を設定する。新出表現を無味乾燥なただの例文にしてしまわないように、目標文が

意味のある、生きた文になるような場面設定を工夫したい。視覚教材は自分で絵や写真を用意したり、インターネットを利用したりしてもよいし、既習のレッスンで用いた教科書準拠のピクチャーカードなどを使ってよい。教科書登場人物の性格や趣味、人間関係などは生徒になじみがあり、場面設定がしやすいため、ピクチャーカードはかなり利用価値が高い。

#### ii) 帰納的に理解させる

教科を問わず、昨今の教育界には「はじめに本時のゴールを明示する」という流れがあるが、ここでは敢えて「帰納的」な導入を提案したい。生徒にとって未知の目標文を、目標言語（英語）で説明し、理解させるよりは、生徒の既習事項をうまく利用し、「理解可能なインプット」をくり返しながら自然に目標文を理解させられるような流れをしくむ方がよいと考えるからである。

また、目標文の意味理解を確かめる段階でもひと工夫加えたい。教師が一方的に説明してしまうよりは、iii) に述べるように、生徒とインタラクションしながら答えを引き出せれば、帰納的な導入がより生きてくる。

#### iii) 生徒とのインタラクションを重視する

英語を実際のコミュニケーション手段とするために、教師が一方的に英語を話すよりも、生徒とやりとりしながら進めることが大切である。これにより、生徒はただ漫然と教師の話を聞くのではなく、頭をフル回転させながら、英語を英語のまま理解し、反応する機会を多く持つことができる。

### イ) 教科書本文の導入（オーラル・イントロダクション）

生徒にいきなり教科書を開かせ、本文を読ませるのではなく、本文の世界に彼らを誘い、本文理解を容易にするように概要を導入するには、英語によるコミュニケーション（オーラル・イントロダクション）こそふさわしい。留意点はア) の i) ～ iii) と共通するが、さらに以下の点も加えたい。

#### iv) 本文を熟読し、口頭で導入すべき範囲を見きわめる

まず、教師自身が本文によく目を通し、どのような場面か、生徒が理解すべきことや彼らに考えさせたいことは何か、新出の語彙や表現は何か、既出であっても理解が難しそうなものはないか、訳語を与えるべきものがあるか、何を口頭で導入し、何を開本させてから文字で読ませたいか、などを見きわめる。

#### v) 本文を意味のある内容として生徒に届ける

本文が生徒にとって意味のある生きた内容となるように、彼らとのやりとりを通して、本文を「知りたい」「読みたい」と思わせられる導入をめざしたい。そのためには教師は用意した台本を淡々と音声化するのではなく、自分自身の考えや思いをこめた、生きた英語を使う必要があり、これは音読をはじめとするスピーキング活動の際に生徒が豊かな英語を発することにつながると考える。

### ウ) 音読

#### i) 音読を「話すこと」の活動と捉える

学習指導要領では「読むこと」に分類されている音読を、本校では「話すこと」の活動と捉えている。音読はほとんどの中学校で日常的に行われている活動であるが、それを教師や生徒が互いに英語でやりとりする場面として認識されることはあまりないように感じる。実際、音読のゴールが、単に「文字を認識し、音声化できること」や「CDのモデルのように上手な発音で読めること」であるならば、コミュニケーションの場面とは言い難いが、ここであえて「音読」を取り上げるのは、本校が伝統的に音読を「話すこと」として捉え、「書かれたものを読んでいる」のではなく、誰かに対して「自分が言っている」つもりで言うことを目指しているためである。教科書に書かれた文であっても、聞いている相手に伝えるつもりで話すように目標を設定すれば、音読は十分にコミュニケーションの場面となる。そういう意味で、音読は「相手に伝える英語を自分のことばで話すこと」の第一歩であり、自己表現のための第一歩でもあると言える。

#### ii) 教師の範読の重要性を認識する

生徒が「自分が言っている」つもりで音読するためには、当然、お手本となる教師の範読が「書かれて

いるものを読む」のではなく、「自分が言っている」ように示せなければならない。そのためには、教師が教科書の内容を背景知識も含めて完全に理解した上で、相手に伝わるための読み方を徹底的に研究し、教科書を見なくても自分のことばで語れるようになるまで何度も練習するべきである。教師の範読が生徒にとって、まるで自分たちに語りかけているかのような生き生きとした英語であれば、当然それを真似する生徒の英語も生きたことばとなり得る。教師の範読は、単に音声的なお手本を示すというだけでなく、教師が生徒にどのような英語を話してほしいかという自身のメッセージを、身をもって伝える機会となるため、その重要性を理解し思い切って英語を話したい。

以上のようなことを念頭に置きながら音読を行えば、そこで耳にし、発せられる英語は自ずと「生きたことば」となり、疑似的なやりとりではあるにせよ、意味のやりとりが英語で行われる授業の一場面となり得る。音読を「読めればよい」で終わらせず、音読こそ教師も生徒も生き生きとした英語を話していると実感できる時間にしたい。

#### エ) コミュニケーション活動① (新出文型練習)

新出事項を定着させるために、口頭での練習はよく行われるが、機械的なドリルもちょっとした工夫で「実際のコミュニケーションの場面」となる。一番簡単なものはドリルで練習した文を「自分に当てはめて」言うてみることである。教師が個別に生徒を指名して言わせてもよいし、ペアワークにすれば単純な情報交換であっても、多くの英語を使わせるチャンスとなる。前者はドリルの後に How about you? など、後者は Now tell your partner about yourself. などの教師の簡単な英語の指示で自己表現の機会を増やすことができる。

#### オ) コミュニケーション活動② (既習事項を総合的に使わせる活動)

チャットやスピーチなど、既習事項を統合的に使わせる活動でも、教師が英語を用いることで、より質の高いものにすることができる。例えば、教師がチャットのモデルを示したり、チャットの輪に入ったりすれば、あいづちの打ち方や話の続け方、深め方の良い例を生徒に生で伝える機会となる。スピーチは話させて終わりにしてしまうのではなく、発表が終わったところで話の内容について教師が英語で質問をすれば、さらに話を掘り下げさせることができるし、効果的な Q&A の良いモデルを示すことにもなる。

#### カ) その他すべての授業場面

まず簡単確実に実施できるのは、毎授業で必ず行う挨拶や、活動の指示を英語で行うことである。本校で用いている教科書 *NEW CROWN ENGLISH SERIES 1 New Edition* (根岸他, 2016) には教師が「教室で使う英語」(p.18) として以下の 19 の表現がイラストと共に掲載されている。

Make pairs. / Make groups of four. / Raise your hand. / Put your hand down. / Open your textbook to page 30. / Repeat after me. / Read the textbook aloud. / Listen to me carefully. / Look at the blackboard. / Write this down. / Put down your pencil. / Time's up! / Come to the front. / Go back to your seat. / Any volunteers? / Let's give him a big hand. / Stand up. / Sit down. / That's all for today.

このような単純な指示でも積み重ねれば相当量となり、生徒は「先生は英語の時間は英語を話すんだ」と自然に感じられるようになる。

また、「英語で表現し合う土壌」(津久井, 2012) を教室内に作るためにも、生徒が自ら発した英語の一言を積極的に拾い、英語での本物のコミュニケーションにつなげたい。ア)～オ) に挙げた活動中のインタラクションはもちろんのこと、物の受け渡しで生徒が発するたった一言の“Here.” に英語で反応するだけでもよいし、授業冒頭の挨拶や small talk, 慣れてくれば遅刻や忘れ物の弁明や、席を立つ許可願(ロッカーへ何か取りに行く、トイレに行くなど)で自然なやりとりをすることもできる。「通じた」「わかった」という英語使用に前向きな経験を積ませたい。

うっかり見落としがちなことであるが、このような自然なやりとりができるレベルに達するには、口頭のり



ピート練習や設定された言語活動だけでは不十分である。つまり、授業内で「場面に応じて」「即言える」ためのトレーニングや取り組みが必要となってくる。それには様々な方法があるが、日本語訳を見て（聞いて）すぐに英語で言うトレーニングや、日頃から Quick response を求めるなどの地道な取り組みも十分効果がある。例えばハンドアウトを配付する際，“How many (sheets do you want)?” の問いかけにすぐ数字で反応させたり、受け取る生徒がすぐに “Thank you.” を言わなければ教師が紙を持った手を放さない（＝渡さない）などといったことは中1の最初からすぐに実践できる。

## (2) 「授業は英語で行う」実践例

### ア) 新文型の導入（オーラル・イントロダクション）

ここでは中学3年に新文型として SVOC（教科書の目標文は The book makes me happy.）を導入する例を紹介する。

#### i) 場面設定をきちんと行う

生徒に聴取させている NHK ラジオ『基礎英語3』のシーンを用いる。場面や人間関係を理解させやすく、また登場人物の気持ちがいろいろと変化するため、様々な例文を自然に提示できる。放送内容の復習にもなり、視覚教材の準備もしやすい。

#### ii) 帰納的に理解させる

T: (アスカがダグを自分の誕生日パーティに誘う絵を示す) Asuka invited Doug to her birthday party. How did he feel?

S: Happy! / He felt happy.

T: (発言を拾って) Yes, he was happy to hear the news. (やや強調して) The news made him happy.

(陰で2人を恨めしげに見ているユキチの絵を示す) Yukichi saw them and thought, “She invited Doug, not me.” How did he feel?

S: Sad.

T: (発言を拾って) Yes, he was sad to see Asuka and Doug talking happily. (未習事項を含むが理解可能と思われる) (やや強調して) It made him sad.

(ブンタがユキチをモールへ誘う絵を示す) Bunta came and said, “Let’s go to the mall. Forget about Asuka.” Yukichi thought, “Asuka-chan didn’t invite me. I’ll play games all night!” How did Yukichi feel then?

S: He was so angry!

T: (発言を拾って) That’s right. He got so angry that he decided to play games all night. (やや強調して) The thought made him angry.

(以下、同様に数パターン続ける)

このように内容を理解させたら、キーワードの made (make) を示したり、目標文をリピートさせたりしながらもう一度同じことをくり返す。1回目で生徒は話の流れを確認し、2回目は内容が分かっている分、英語の表現に集中することができる。生徒の理解度によっては意味を理解させながら同時に表現練習を行ってもかまわない。

生徒が新文型に十分慣れたところで、文を黒板に提示し、既習の make の意味との違いや、目的語と補語の関係、日本語との違いなどを考えさせ、生徒の発言を拾いながら、新文型をしっかりと理解させる。

#### iii) 生徒とのインタラクションを重視する

ii) で示したように、生徒に多くの問いかけをし、発言を引き出しながら進めていく。こうして生徒にリアクションの機会をたくさん与えることで、教師は生徒の理解度を推し量ることができ、話す英語の内容、ならびに練習させるタイミングや量を調整することができる。

イ) 教科書本文の導入 (オーラル・イントロダクション)

教材：三省堂 NEW CROWN 2 Lesson 7 Presentation

Lesson の最後の Read のページ (pp.92-93) なので文章も長く、新語、新表現も多い。

i) 扱うべき項目

文法	: 本課の文法は比較級・最上級。前時までに既習。
内容	: メール・手紙・電話の比較を題材に以下の5段落。 ①導入②メールの利点③手紙の利点④電話の利点⑤まとめ
単語・表現	:
<新語>	_____ の語
<新表現>	_____ の表現
	・ as ~ (接) ~ (する) のと同様に
	・ worth ~ ing
	・ the other (other は既習)
<最近学習した語・表現>	
	keep in touch, reason, convenient, may (かもしれない), in conclusion
<既習だが、難しいと思われる物>	~~~~~
	・ <u>I asked my 38 classmates this question.</u> SVOO の O が長い。 ask での SVOO にあまり触れていない。
	・ <u>most of ~</u> L.5 で既習。
	・ <u>less</u> 前のページの不規則変化表で出ているのみ。前ページで練習しておく必要あり。

ii) このページを英語で理解させる上での方針

教科書を英語で扱う上で、内容・表現ともに、どこを英語で話し、どの程度訳語を使うかという方針を考えておかなければならない。下に示す扱いは一つの例である。

**内容** : 5つの段落のうち、④電話の利点のみ読み取らせることにして、①②③⑤については、内容や語を英語で伝える。どの程度をイントロダクションで伝え、どの程度を読みに残すかは、諸々の要因から教師が決定することである。今回のように多くの部分を教師が話す理由は、無機質に字が詰まっている印象のページにも意味のある内容が書かれていることを感じさせるためである。

**新語について** :

- ・ 英語で使用例を聞かせて推測させた上で日本語訳を言うもの : common, respond, anytime, worth, choose, prefer, each
- ・ 使用例は聞かせるが、訳語は開本時に与えるもの : as, the other
- ・ 単純なので、直ぐに訳語を言うもの : chart, personal
- ・ 訳語も説明も不要と思われるもの : call, line, point
- ・ 開本して読んだ時に触れるもの : close (親しい), end (端), line (電話線)

iii) 実際のオーラル・イントロダクションの例

① "How do you keep in touch with people?" <u>I asked my 38 classmates this question.</u> The three <u>common</u> answers were by e-mail, letter and phone. Let's look at their reasons.
--

T: Look. (Part2 の絵を見せながら)

How does Paul communicate with his friends?

How does he keep in touch with his friends?

(keep in touch という既習表現をよりなじみのある communicate

と合わせて言い、思い出させる) By e-mail or by letter?

S: By e-mail.

T: Right. In Part 3, Meiling read an article, 記事. What does this article say?

S: It says that letters are as good as e-mails.

T: Good. Then what do YOU think? How do you communicate with people? How do you keep in touch with people?

Meiling did research. Meiling asked her classmates this question: How do you keep in touch with people?

There are three common ways. Tell me what they are. Some strange classmates may answer that they always use gestures only. Is it a common way to communicate? No! It's strange. Tell me the common ways, not strange ways. common よくある。What are the common ways?

S: E-mail. S: Letters. S: Telephone.

T: Right. These three are the common answers.

② As the chart shows, twenty of my classmates like e-mails the best. They think e-mails are easier and more convenient than other ways.

They can send, read and respond when it is the best for them. They can do these things anytime.

T: Look at this chart. chart 図。

How many classmates like e-mails? Yes. Twenty.

Look at the next chart. This chart shows the reasons.

As this chart shows, the twenty students think e-mails are ...

S: Easy. S: Convenient.

T: OK. Then why is it so convenient? What is the good point of e-mail?

S: 字を気にしなくていい。

T: Thank you. 字 handwriting. 心配しなくていい。英語で言える?

S: We don't have to worry about our handwriting.

T: Excellent! Any other good points?

S: 相手の都合を考えなくていい。

T: Yes! When I want to call someone, I always see something. What is it?

S: Watch./ Clock.

T: Yes. I always think "Is it good time for her to answer the phone?" when I call. You can't call your friends late at night.

How about e-mails? Can you send e-mails late at night? Yes. And your friend can read them and send the answers, send the responses at midnight.

Your friend can respond at midnight or at five o'clock in the morning... anytime. At one o'clock, OK. At three o'clock, OK. Anytime. いつでも。(send, read, respond をそれぞれ図示する。)

You can respond an e-mail anytime. respond って何でしょう。返事を返す, 返信する, ということですね。

③ Twelve of my classmates like letters the best. What are their reasons? They feel letters

T: So I think most of you use e-mails very often.

Of course we often use e-mails when we work.

are more personal than e-mails. Letters are for the best and closest friends. Letters may take more time than other ways, but they are worth taking it.

④ Why did four of my classmates choose phone calls? In a phone call, you can hear the voice of the person at the other end of the line. They say this is the best way to understand the person's feelings.

⑤ In conclusion, most of my classmates prefer e-mails. Letters and phone calls are less popular, but they have good points. Each way to keep in touch is as good as the others.

Do you send your New Years' message to your uncle or aunt by e-mail? I don't. I write cards.

Cards or letters are more personal than e-mails.

Person 人間 1 人。Personal 個人的。

I use 便せん only when I write very personal letters.

Which takes more time to write, an e-mail or a letter?

S: A letter.

T: Letters take more time to write. But when you get letters, you must be very, very happy. Letters are worth taking time. I bake a cake only on Christmas Eve. Of course it takes time. But my children are happy. So the cake is worth baking. worth 価値がある。

Letters are worth taking time.

How about the telephone?

What are the good points of phone calls?

In Meiling's research, some classmates chose phone calls. Why did they choose (3枚のカードから一つをつまみ取る動作をする) this answer? choose 選ぶ。

e-mails

letters

phone calls

Read their answer later.

T: In conclusion, 結論として, most people like...

S: E-mails.

T: Yes. Most people like e-mails better than the other two. They prefer e-mails. Prefer こちらの方が好き。

But letters have some good points. Phone calls have good points.

Every way has good points. Each way has good points.

You, 41 students, everyone has some good points. Each student (1人1人をさしながら) has good points.

#### iv) オーラル・イントロダクションの後の流れ

オーラル・イントロダクションの後、内容についてのQ&Aは入れることも入れないこともある。また、かみ砕いたり、ふくらませたりしない、教科書程度の文を再度聞かせる場合もある。

重要なのは開本してからである。まず、開本したら黙読させる。この時、読み取るべき質問を与えておくとうまい。上の例では、電話の利点は話していないので、読み取らせる内容となる。黙読の際に、疑問に思った点をピックアップさせるのも大変よい。

黙読後、冒頭から丁寧にクラス全体で確認していく。ここではスローラーナーもついて行けるように丁寧に話すので、日本語が多くなる。ただ「丁寧に」とは言っても全文訳にならないように注意する。訳や訳文を言っても、その後相当する英文を聞かせ、必ず英語に戻ってくるように心がける。

オーラル・イントロダクションの中で触れた新語（たとえば、上の指導例では、common など）も、この段階で再度意味を確認する。また、as, the other, close など、触れられなかった新語、新表現もここで簡潔に指導する。訳語を使ってよいので、それほど時間はかからないはずである。

このようにして、音読の前には、十分に文の理解はできている、という状態にすることが肝要である。

#### ウ) 音読

ここでは中学1年生を対象に、次に紹介する *NEW CROWN I* Lesson 2 の GET 1 (pp.30-31, 目標文は What is this?) を音読する際に、教師がどんなことに留意しながら指導するかを具体的に示す。

Ms. Brown:	What is this?
Ken:	It's a coin.
Ms. Brown:	Really?
Ken:	Yes. It's very old.
Ms. Brown:	What is that?
Ken:	It's an old calendar.
Ms. Brown:	A calendar? It's interesting.

この会話は、新しく学校にやってきた ALT のブラウン先生と、ブラウン先生に学校を案内している健が、図書館に展示されている江戸時代の硬貨（寛永通宝）と絵暦（文字の読めない人向けに作られた絵によるカレンダー）を見ながら交わされているものである。

#### i) 音読を「話すこと」の活動と捉える

3. 提案の (1) ② ウ) i) で述べたように、音読を「話すこと」の活動とするためには、それぞれのセリフがどういう気持ちや声色で発せられているのかを一人一人がイメージできていなければならない。冒頭の質問が Is this a coin? ではなく What is this? なのも、それが coin だと想像できなかったためにこう聞いているのであるし、なぜ coin だと聞いてから Really? と反応しているのか、また、絵暦が calendar だとわかったとき、何をもってして interesting だと言っているのか、といったことが実感として持てないまま音読すると、「単に文字を音声化しているだけの音読」になってしまう。同様に、What is this? と What is that? を言う際には、どこを指さして尋ねているのかも、理屈でわかっているだけでなく、実際にそれを話すときに頭にイメージでき、場合によっては実際に指さす動作を伴って話せなければ、これらの文が言えたことにはならない。

そのためにも、音読に入る前のオーラル・イントロダクションや開本後の説明では、上記の点がイメージ出来るように生徒とやりとりする。例えば Really? や It's interesting 等のセリフは、登場人物のセリフとしてではなく、実際に寛永通宝や絵暦の絵を見ながら、教師が実際にそう感じて発しているかのように言うことで、どのようなタイミングで何に対して使われるセリフなのかを実感させたい。

#### ii) 教師の役割と範読の重要性を認識する

生徒が「話すこと」の活動として音読するためには、3. 提案の (1) ② ウ) ii) で述べたように教師の範読が非常に重要となる。生徒はいきなり「自分が言っているつもり」でスラスラと話せる訳ではないため、実際には①文字を正確に音声化し、正しい発音やイントネーションで読む、②読めた文を「自分が言っているかのように」表現する、といった2つのことを、段階的に（最終的には同時に）できるように指導したい。上記のテキストであれば、まずは①の段階として個々の単語の音を正確に出せるようになり、それに加えて、What の質問の下降調、弱音となる語、逆に大きめに言いたい語、It's an old calendar. のリエゾン、等は意識して読めるよう、教師はねらいを持って範読する必要がある。また、こうした事柄に関しては教師のお手本を真似させるだけでなく、しっかりと生徒の音読に耳を傾け、音が出せていなければそこを指摘し、何度も練習させるといった「指導」を疎かにしてはならない。

文字を正確に音声化できるようであれば、今度は②の段階として、個々のセリフがそこに込められた思い

も含めて聞き手に伝わるにはどう言ったら良いかを考えながら音読させる。ここでも教師の範読が重要となる。What is this? は目の前の展示を指さしつつ何なのか見当もつかない様子で、Really? や A calendar? は coin や calendar だとは思えないという驚きとともに、It's interesting. は今まで見たこともない絵だけのカレンダーに心奪われて、というように、聞いている生徒が話し手のセリフに込められた思いを想像できるような英語を聞かせ、真似させたい。発音だけでなく、上記のように「(文字を) 読んでいる」のではなく相手に向かって「伝えようとしている」英語を聞かせられるのは、教師だけであり、CDのモデルではない。この範読こそまさに教師が「英語を話す」場面であり、そのためにも、教師の範読はできるだけ教科書を見ながらではなく、生徒を見ながら行いたい。

生徒に音読させる際も、教師のお手本を真似しながら、相手に伝えるためにどう話すかを意識させるが、ここでは必ずしも教師の読み方を完全にコピーさせず、あくまで「自分がそのセリフを言っているつもり」で言わせるようにしたい。つまり、1つのセリフに対して教師と同じ解釈ではなく、例えば Really? というセリフを、純粋に驚いているように言っても、訝しげに相手に確認するように言ってもかまわない、といった自由度はあってしかるべきだということである。大切なのは聞いている教師やクラスメイトがその英語を聞いて意味や意図が伝わってくるか、ということで、教師の範読で真似させたいのはあくまで「英語を話す姿勢」だと言っても良い。教師は生徒が音読するときには教科書ではなく生徒の方を見て生徒の音読を受けとめ、聞き手に伝わる英語が言えているときには具体的に何が良かったのかコメントをするなど、しっかりと評価したい。また、個人に音読させる際には、教師だけでなく、同じ教室にいるクラスメイトにもよい聞き手、さらに言えば相互に良さを認め合えるような聞き手になるように指導したい。

### iii) 音読をより「話すこと」に近づける

教科書の文字を見ながら音読することに慣れたら、さらに「話すこと」に近づけるために、顔を上げて話す段階に進む。実際に聞き手がいることを想定して、もしくは隣の生徒など具体的に伝える相手を決めて、教科書から聞き手へと顔を向けて教科書の文を発話させたい。この時期の教科書の文は1文が短いため、何度も音読をするうちに顔をあげて話せるようになるが、学年が進み、文が長くなってくれば、もう少し丁寧な指導が望まれる。例えば、虫食い音読(教科書本文の何語かを空所にしておき、それを補いながら音読する)で意味を考えながら音読させたり、Read and Look upで教科書の文を「読む」ことから、自分で英文を考えて「話す」ことにつなげる練習をするなどのステップを踏ませた上で、音読を「話す」活動へとつなげる。今回紹介した例は会話文のため、役割を分けて実際にペアで会話する活動も想定できるが、会話文でなくても、最終的には顔をあげて誰かにその内容を伝えることを目標にする。

また、「自分が言っている」ように教科書の文を扱う工夫として、いくつかの相づち表現を学習した後であれば、本文の Really? や It's interesting. を他の表現に変えてもよいとしたり、教科書の文にはない文を1文追加したりするなど、音読から自己表現活動に発展させることも可能である。

なお、本校ではこうした授業や家庭学習での音読練習の成果を、長期休暇明けに音読発表会という形で披露することで、評価につなげるとともに、生徒同士がよりよい表現の仕方を学べる機会にもなっている。

## (3) 留意点

(2) では「授業は英語で行う」ことの実践例を紹介したが、それらを目的にあった効果的な指導とするためにはどのような点に留意したら良いかを、以下に改めて述べることにする。

### ① 英語で行われる授業への不安を取り除くこと

英語での授業を効果的に行うためには、まず「『英語で授業なんて耐えられない』と拒絶反応を示しかねない英語苦手派の生徒たちの不安を少しでも取り除いて」(井ノ森, 2012) おく必要がある。実際に英語で授業を行うことで、徐々にその意義を生徒に体験的に理解させるのも一つの方法だが、日本語メインの授業スタイルに慣れてしまっている生徒には戸惑いが大きいと思われる。そのような場合には、教員が授業を英語で行うことの意義を、「生徒の理解の程度に応じた英語を用いるよう十分配慮する」(高等学校学習指導要領, 2009) ことなどとともに、明示的に伝えることも大切なのではないか。

本校では上記の内容を、英語科の教師が学校説明会や入学準備説明会において、受験生や新入生とその保護者に対して説明している。具体的には、本校の英語教育の特徴の一つは、授業では教師も生徒もほぼ英語を使ってやりとりをすることであるということ、実際の映像などを用いて英語科の教師が伝え、理解を求めることにしている。

## ② インタラク션을重視すること

すでに何度か話題にしたことであるが、現行の高等学校学習指導要領で「授業は英語で行うことを基本とすること」と謳われている最大のねらいは、「授業を実際のコミュニケーションの場面とするため」である。したがって、いくら教師が英語を使って授業をしても、教師が一方的に話している講義型の授業では意味がない。もちろん、それだけでも「生徒が英語に触れる機会を充実する」という点では目的を達成していると言えなくはないが、そのようにして学習した英語を生徒が実際に授業中に使用する場面を設けなければ、生徒の英語運用力は高まらない。

授業中に生徒が十分に英語を使うようにする方法については、(2)でその具体例を示した。それらを実行する上でぜひ頭に置いておきたいのが、教師と生徒とのインタラク션을重視した指導過程を考えることである。例えば、英語で指示を出したら、生徒に何らかの応答をさせるようにしたい。また、オーラル・イントロダクションでは常に生徒に語りかけ、生徒からの反応を受けて進めるような流れを考えるようにする。そのような生徒の反応（応答）を前提とした指導を意識した授業を行うことは、生徒が授業中に話す英語の量を格段に増やすことになる。また、生徒は自然に教師の英語を集中して聞くようになり、結果として彼らの「聞くこと」の力を高めることにもつながるのである。

## ③ 100%英語で授業をしようとしないうこと

「授業は英語で行う」と言うと、教師が授業中話す英語をすべて英語にする、すなわち「オール・イングリッシュで授業を行う」と考える人が多いようだが、それは誤解である。なぜなら、先述の高等学校学習指導要領で、「授業は英語で行うことを基本とすること」について記述された部分を改めて読めばそうとわかるからである。つまり、オール・イングリッシュで授業を行わなければいけないということはどこにも書かれていないのである。もちろん、教師が話す英語も教材であると考えれば、その絶対量を増やすということはまちがいない。しかし、だからと言って教師が話す場面をすべて英語にする必要はない。それは「すべて英語で」と考えてしまうと、「自分にはできない」と思う教師は「授業は英語で行う」ことを諦めてしまうからである。そうになると、「0か100か」という極端な状況が生まれてしまうことになり、前者の教師の授業はいつまで経っても変わらない。この点については、先述した東京高等師範学校附属中学校の『教授細目』にも次のように書かれている。

「されど、例へば事物の名称の如き、英語を用ひては徒らに長き説明を要するもの、並びに文法上の説明の如き正確を要するものには、國語を用ふることゝす。」

100年以上前に、「外国語の教授時間には生徒をしてその外国語の行はるゝ社會中にある如き感を抱かしむるを可とす」と考え、そのために「成るべく英語のみを用ふ」としていた当時であっても、指導する項目や場面によっては日本語を積極的に使うことを奨励していたのである。教師が英語を使うべき場面ではできるだけ積極的に使うようにする一方で、日本語で指導した方が効果的である場合は積極的に日本語を使った方がよいというわけである。

## ④ 授業での言語使用に対して教師の意識を高めること

授業を英語で行う（多くの場合において、授業で英語を使う量を増やす）ためには、教師が授業中の自分自身の言語使用に対しての意識を高める必要がある。つまり、私たちが授業中に、英語と日本語の二言語をどのような場面でどれだけ使っているのかに、より注意を払う必要がある。なぜなら、母語を生徒と共有する教師は、自分で思う以上に教室での母語使用が多くなる傾向があるからである（Liu et al., 2004）。自分がどのように二言語を用いているかは、授業を録音（録画）してみればすぐに確認することができ、また自然に日本語の過剰使用を防ぐことにもつながる。

授業中にどちらの言語を用いるか選択する最終責任は教師にあり、その選択の積み重ねは後述するアンケート結果にも表れているように、英語の授業が英語で行われるということに対する生徒の価値観形成に大きな影響を及ぼす。我々教師は言語選択の最終責任者として、英語と日本語がそれぞれ授業で果たす役割や効果をよく知り、生徒の英語習得促進に適した「考え抜かれた言語選択 (deliberate language choice)」(Cameron, 2001)を心掛けるべきである。

#### ⑤ 生徒にわかる英語を使うこと

本校の研究協議会でも過去に何度か「授業は英語で行う」ということをメイン・テーマを実現するためのサブ・テーマとして取り上げたことがあるが、その際に複数の先生が「何度か英語で授業をしようとしたが、生徒が『わからない』というので諦めた」ということを異口同音に語っていた。はたして今回私たちが提案していることは一般的な公立中学校ではできないことなのであるか。この点についてはきっぱりと否定することができる。それは全国に「授業は英語で行う」を実践している公立中学校の教師が大勢いるからである。

生徒が「わからない」と言う原因の一つに、教師が使っている英語のレベルの問題があると考えられる。教師が英語を話すとき、多くの場合は伝えたい内容を日本語で考えてそれを英訳してから声に出すと思われる。この時に頭に浮かんだ表現をそのまま直訳したのでは、生徒にとって理解するのが難しい表現になりがちである。例えば、「5問正解だった人は手を上げて」ということをそのまま直訳すれば、Those who have got all the five questions correct, please raise your hand. とでもなるであろうか。しかし、中学生にとって前半の部分はかなり難しい。そこで、少し頭を働かせて、What is your score? Please raise your hand. 5 points? などとすれば1年生の最初でも理解してもらえる。このように生徒にわかる英語に言い換えられるかが重要である。また、咄嗟のことで上記のような表現が思い浮かばなかったときに、Five questions, all OK, raise your hand. などとすることも考えられるだろう。ただ、これについては「正しくない英語を生徒に聞かせるのはよくない」という批判があるかもしれない。しかし、その批判を恐れて日本語を使ってしまうのでは、いつになっても「授業は英語で行う」を実現することはできない。多少文法的には怪しい英文であっても、教師がそれを積極的に使う姿勢を生徒に見せて、生徒が英語を臆せずに使おうとする姿勢を育てるためのモデルとなることの方が重要である。

## 4. 成果と課題

### (1) 成果

#### ① アンケートの結果から

「授業は英語で行う」ことの成果を、そうではない授業と比較して実証的に証明することは残念ながら本校ではできていない。それは本校ではこれまでずっと前者の授業しか行ってこなかったからである。しかし、先述した「四校研」では、「中期計画のまとめ」(筑波大学大塚地区四校研, 2016)において、附属小・中・高の3校に共通する指導法の一つとしての「授業は英語で行う」について生徒にアンケートを採った結果を報告した。このアンケートでは、「授業の多くが英語で行われる」「教科書の内容について先生が英語で話したり、英語で応答したりする」「新しい文法の入った文を先生が英語で場面設定して聞かせる」ことについてどう感じているか、「役に立つ」「少し役に立つ」「あまり役に立たない」「全く役に立たない」の4つの選択肢から選ばせた。以下にその結果(実施日:平成27年7月,対象:附属中3年生)をグラフで示す(図2)。

生徒自身も「授業は英語で行う」状態が普通だと思っているので、そうでない授業との比較はできないが、どの項目についても「役に立つ」あるいは「少し役に立つ」と感じている生徒が9割を超えており、英語で行われる授業をおおむね好意的にとらえているとすることができる。

#### ② 育った生徒の状況から

本校の生徒は多くが英語を聞いたり話したりする活動に意欲的に取り組んでいる。特に「話すこと」の活動においてはみんなが臆することなく堂々と自分の英語を使って相手に伝えている。このような生徒の姿は、日頃の授業において「授業は英語で行う」を実践してきたからこそ実現できているものであると自負している。それは、授業において教師も生徒も英語を使ってコミュニケーションすることが当たり前になっている状況の中で、生徒は積極的に英語でコミュニケーションしようとする意欲とコミュニケーションできる能力を身につ



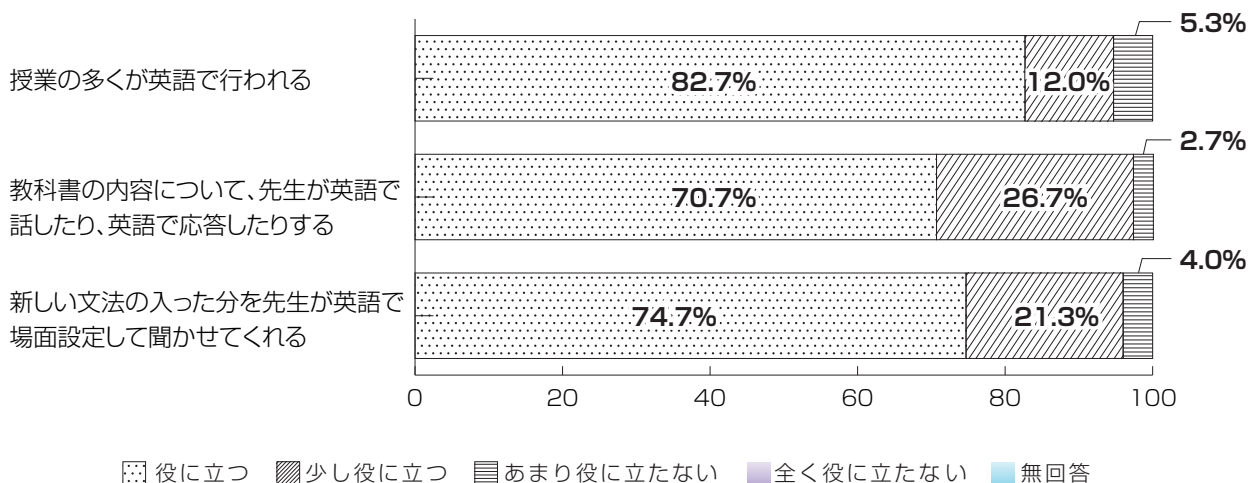


図2 アンケート結果（平成27年7月実施 附属中3年生対象）

けているからである。特に、インタラク션을重視した指導法は、生徒が気軽に英語を口にしようという気持ちを持たせることに成功しているようである。

## (2) 課題

### ① 英語教育界の指導体制について

英語教師の中には、学習指導要領に言われるまでもなく「授業は英語で行う」ことが生徒のためになると本気で考えている人が大勢いる。それでもこの指導法が広まらないのはなぜであろうか。この点について、元東京学芸大学教授で全国英語教育研究学会の会長も務められた金谷憲氏は、高等学校で「一向に日本語しか聞かえてこない授業が無くならない」ことを、「これを専ら個々の英語教師の怠慢に求めるのでは、いつまで経っても問題は解決しない」とした上で、次の4つの問題点の改善が必要であるとしている（金谷，2012）。

- 教材問題…教科書の難易度と生徒の実力との差が大きく、内容理解に授業時間の大半が割かれている。
- 教員養成・研修問題…大学の英語科指導法の時間が少なすぎる。教員研修が不十分である。
- 同僚問題…教師間のコンセンサスを得ることが難しく、個々の教師が勝手なことをしている。
- 入試問題…難問奇問が未だに残っている。入試に対する心理的プレッシャーで授業形態を変えにくい。

上記は高等学校のことであるということであるが、教員養成・研修については中学校でも同様のことが見られるのではないであろうか。ぜひとも各学校を管理する機関・部署に早急の検討をお願いしたい。

### ② 個々の教師の英語力・指導力について

①のような個々の教師の力ではなかなか進まないこともあるが、それを理由に個々の教師が努力をあきらめてしまっは先に進まない。

教師個人ができることとしては、まずは自分の英語力を磨くことである。特に「授業は英語で行う」ということに関しては「話すこと」の力をブラッシュアップすることが大切である。英語教師の中には「発音に自信が無い」と言う教師が少なくないが、もしそうであるならば、自分でそれを解決する努力をすべきである。かつてNHKテレビの「わくわく授業」に何度も取り上げられ、「世界のカリスマ教師100人」にも選ばれたことがある元鳥根県松江市立中学校教師の田尻悟郎氏（現関西大学教授）は、通勤途中にラジオから流れる英語ニュースでシャドーイングをして自分の英語力を鍛えたという。今では「名人」の誉れ高い教師でも、かつてはそのように自分の英語力をアップできるように努力をしていたのである。

また、指導法のブラッシュアップも自身でできなくはない。指導法を学び合う学会の研修会が定期的にかかれているので、その情報を得て参加してみるのがよいであろう。それらの多くは大都市圏に集中しているが、最近では地方でもサークル活動が盛んに行われている。どこでどのような研修会が開かれているかは、インターネットで検索してみるといいであろう。

### ③ インタラクシオンを可能にする指導について

「授業は英語で行う」、つまりオーラル・インタラクシオンの活発な授業を行うには、それを可能にする、それ以前の指導も大切である。

例えば、システムのことで言えば、教室の座席位置の工夫も大切である。本校では異性同士のペアや男女混合のグループ活動がスムーズに行われるが、それは教室の座席配置によるところも大きいと思われる。本校では少なくとも40年前にはすでに全校的に教室の座席が「市松模様」（男女が交互に座っていること）であったことがわかっており、現在もそれが踏襲されている。英語の授業のみならず、すべての教科の授業で男女が仲良く活動できているのは、普段の生活から男女間の異性に対する心理的な壁が低くなるようにしているからであろう。これは、「学びの共同体」を提唱している学習院大学教授の佐藤学氏が東京大学教授時代から指導してきた全国の小中学校で実績を上げている方法でもある（佐藤，2006）。中学校によっては男女間の意識を気にする余りに同性同士のペアにしたり、クラス全体を男女の集団に分けたりしている学校もあるが、「授業は英語で行う」ことを理由に異性同士のペア座席（できれば市松模様）にしてみてもどうか。学年や学校としてそれは難しいということであれば、英語の時間だけ別の座席にするというやり方もあるであろう。

しかし、何よりも大切なのは、授業中に生徒が自由に発言しようという気持ちになれる教室環境を整備することである。それは、どれほど立派な教師の英語力や教授法があっても、また生徒に英語を話そうという意欲があっても、自分が所属する集団（ここでは学級）の人間関係がギクシャクしていたり、互いに牽制し合うような雰囲気があると、生徒は発言を躊躇してしまうからである。そのようなことが起こらないように、学年担任団との協力の下に生徒同士の人間関係を良好にすることを常に念頭に置いて授業をすることは、授業において活発なオーラル・インタラクシオンができる土台を作る上で欠かせないことである。そして、そうした指導を生徒が受け入れてくれるような状況も作る必要がある。つまり、教師と生徒の人間関係を良好にすることである。生徒に教師の指示を素直に実行してもらうためには、平素から生徒に信頼される教師でなければならない。「授業は英語で行う」の成否は、実は英語の授業を行う以前のところから始まっているのである。

### 参考文献

- 井ノ森高志. (2012). 「初めての英語で授業 まずはここから」『英語教育』2012年4月号 大修館 pp.31-33.
- 金谷憲. (2012). 「『英語授業は英語で』をめざして」『英語教育』2012年4月号 大修館 pp.10-12.
- 『基礎英語3』(2016). 2016年6月号 NHK出版
- 佐藤学. (2006). 『学校の挑戦 学びの共同体を創る』小学館
- 中央教育審議会教育課程部会. (2016). 「平成28年8月19日教育課程部会教育課程企画特別部会資料2-1『次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ(案)』」<[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryo/\\_icsFiles/afiedfile/2016/08/22/1376199\\_2\\_2\\_5.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryo/_icsFiles/afiedfile/2016/08/22/1376199_2_2_5.pdf)>, アクセス日: 2016-08-26
- 津久井貴之. (2012). 「教科書を主たる教材として扱う授業」『英語教育』2012年4月号 大修館 pp.22-24.
- 筑波大学大塚地区四校研. (2016). 『四校研活動報告(平成22~27年度)「中期計画まとめ-小・中・高一貫カリキュラムをめざして-」』
- 東京高等師範学校附属中学校. (1910). 『教授細目』
- 根岸雅史他. (2016). *NEW CROWN ENGLISH SERIES New Edition*. 三省堂
- 文部科学省. (2003). 「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」<[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryo/04042301/011.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryo/04042301/011.htm)>, アクセス日: 2016-08-26
- 文部科学省. (2009). 『高等学校学習指導要領』
- 文部科学省. (2013). 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」<[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/25/12/\\_icsFiles/afiedfile/2013/12/17/1342458\\_01\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/_icsFiles/afiedfile/2013/12/17/1342458_01_1.pdf)>, アクセス日: 2016-08-26
- Cameron, L. (2001). *Teaching languages to young learners*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Krashen, S. (1982). *Principles and practice in second language acquisition*. Oxford: Pergamon Press.
- Liu, D., Ahn, G., Baek, K., & Han, N. (2004). South Korean high school English teachers' code switching: questions and challenges in the drive for maximal use of English in teaching. *TESOL Quarterly*, 38 (4), 605-638.
- Palmer, H. E. (1924). *Memorandum on problems of English teaching in the light of a new theory*. Tokyo, Institute for Research in English Teaching.